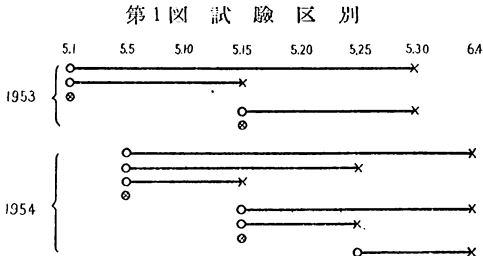


麦間挿苗における麦による遮蔽が甘藷の生育収量に及ぼす影響

長谷川 浩*・菊川 誠士*・八尋 健*

HASEGAWA, H., KIKUKAWA, S. & YAHIRO, T. Influences of the Shading of Wheat upon the Growth of Sweet Potato under the Intercropping

材料と試験方法 小麦農林61号と甘藷農林1号を用い、麦は条間・複条間を夫々1953年は1.2尺と3.6尺、1954年は1.5尺と3.5尺とし、第1図の如く試験区別を設けた。なお1954年甘藷農林1号外3品種を用い5月10日挿苗、間作期間24日とし遮蔽の影響の品種間差異を検した。



注 ○挿苗期 ×条列取 ⊙挿苗当日取 →間作期間

試験結果と考察 1) 活着 1953年は各区とも晴天に遭遇し、裸地区では苗の萎凋度大で、活着がおくれた。このことは、5月1日植裸地区の挿苗10日目株当根数10.5本、総根長26.5cmに対し、間作区は19.0本及び34.8cmであることから認められる。一方、1954年は5月25日植以外は各区とも、降雨に恵まれ、活着に区間差はなかつた。

2) 初期生育 年次・挿苗期を問わず、蔓の伸長は間作区が、また間作期間の長いものが勝つた。しかし、1953年の30日区では分枝数が劣つた。

3) 収量 1953年は各区とも、間作15日区が裸地区に勝り、間作30日区と裸地区との間に差がなかつた。1954年は5月25日植においてのみ、間作区が裸地区に勝つた(第1表)。なお、同年の品種試験の結果

果からは、遮蔽による影響に品種間差は見られなかつた(第2表)。

第1表 総藷重成績 (反当質)

年次	1953		1954			
	5.1	5.15	5.5	5.15	5.25	
挿苗期						
間作期間	0日	544	589	519	479	416
	10	—	—	512	488	496
	15	623	625	—	—	—
	20	—	—	488	489	—
	30	522	—	500	—	—
L.S.D	0.01	57.4		96.2		
	0.05	33.6		70.4		

第2表 総藷重成績 (1954) (反当質)

区別	品種	1954			
		農林一少	農林二少	フクロセ	沖繩百号
間作区		639	464	537	588
裸地区		691	441	517	562
差の有意差		not	not	not	not

4) 考察 間作区が裸地区に比し増収した場合は、例外なく間作区の活着は裸地区に勝つていた。しかし、1953年の間作30日区の活着は裸地区に勝つていたが、増収は見られなかつた。これは、同年間作期間の日平均日照時数が1.7時間にすぎず、1954年の3.4時間に比して少なかつたため、長期遮蔽の影響を蒙つたものと考えられる。これを要するに、麦間挿苗における麦の遮蔽は、挿苗期晴天の場合、活着を早め、収量に好影響をもたらすが、間作期間30日に及ぶと天候不良な場合には、幾分悪影響を蒙るものと考えられる。なお、両年度の麦の生育は中程度で、尺間穂数55本、反収1.8不程度であつた。

*九州農業試験場